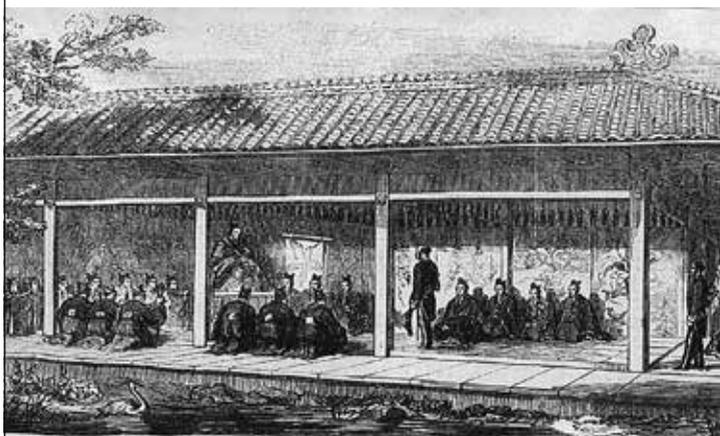


鴨 東 通 信

春

2016.4 No.101



FIRST AUDIENCE OF A BRITISH MINISTER WITH THE SHOGUN OF JAPAN AT EDO.—FROM A SKETCH BY S. J. DOWELL.

● 日常語のなかの歴史 14
ばんちゃ【番茶】
中村羊一郎

● ていいたいむ
人の記録が示すもの——アーカイブズを学ぶ——
大友一雄

● 本づくり温故知新 2
株式会社 大人

● エッセイ
比較史に救われ、個別実証に生きる
木下光生

天皇か、徳川か——慶応四年の政權選択
宮間純一
「いけばな」と「花道」
井上 治

● リレー連載 世界の中の日本研究 22
日本思想史研究の国際化のために
竹村英二

● 史料探訪 62
谷文晁 一門・船津文淵「四季草花図小襖」
鶴岡明美・多田文夫・小林優

変容する聖地 伊勢

ジョン・ブリン編

〔5月刊行予定〕

▼A5判・三二〇頁／本体二、八〇〇円

不変の聖地か／変容する聖地か――。伊勢神宮は古代から変わることなく受け継がれてきた聖域というイメージで語られる。しかし、その神宮像はそれほど時代をさかのぼるものではなく、神宮が移りかわる時代のなかで大きく変貌を遂げてきたことはあまり語られていない。古代から近・現代にわたる論考一六編を取め、伊勢神宮の変容の歴史をひもとく。

……内容……

I 古 代

考古学からみた伊勢神宮の起源(山中章)
伊勢に見え隠れする仏教 七六六～七八〇(ヘルマン・オームス)
『延喜式』制以前の伊勢神宮(小倉慈司)

II 中 世

中世伊勢と仏教(ウィリアム・M・ボディフォード)
夢告と観想(伊藤 聡)
地中の仏教(D・マックス・モーマン)
混沌の始めを守る(マーク・テーウエン)

III 近 世

復活か創造か(西山 克)
読み替えられた伊勢神宮(斎藤英喜)
御蔭参りにおけるお札降り現象(劉 琳琳)

IV 近代／現代

伊勢における神仏分離(河野 訓)
神苑会の活動と明治の宇治山田(谷口裕信)
修学旅行と伊勢(高木博志)
昭和四年式年遷宮と伊勢(田浦雅徳)
戦後の伊勢(ジョン・ブリン)
補論 浮遊する記号としての「伊勢」
(ファビオ・ランベッリ)

ネット書評
データベース
募集
詳細は32頁

さあ、歴史の深層へ！

幕末外交儀礼の研究

欧米外交官たちの将軍拝謁

佐野真由子著

〔6月刊行予定〕

▼四六判・四二〇頁／本体五、〇〇〇円

近代外交の夜明けは幕末に――。

日本と欧米の国との正式な外交関係は、安政四(一八五七)年、米国総領事タウンセンド・

ハリスの登城・将軍家定拝謁で幕を開けた。

本書が取り上げるのは、徳川幕府終焉まで計

一七例を数えた、欧米諸国の外交官による将

軍拝謁。幕府は自らの儀礼伝統に則り、同時

に西洋の慣習とも齟齬のない形で、その様式を完成させていた。

政治交渉の過程とは異なる次元で展開した外交儀礼の形成過程は、

従来の研究で見落とされてきた、もうひとつの幕末史である。

ネット書評
データベース
募集
詳細は32頁

内 容

序 章

I 幕末外交儀礼の背景

第一章 徳川幕府の儀礼と対外関係

第二章 欧米諸国の外交儀礼

II 幕末外交儀礼の展開

第三章 アメリカ総領事ハリスの将軍拝謁(安政四年)

第四章 試行錯誤

第五章 儀礼様式の成立

第六章 各国公使の徳川慶喜拝謁(慶応三年)

終 章 「対等外交」をもたらした幕末外交儀礼

さの・まゆこ……一九六九年生。ケンブリッジ大学国際関係論専攻
MPH課程修了。現在、国際日本文化研究センター准教授。

ばんちや【番茶】

鬼も十八番茶も出花でばな

若さだけでも取り柄になる、安い番茶でも出花なら、それなりに飲めるからねという、番茶にとつては、ちよつと迷惑なたとえだ。高価な茶であつても来客に対しては、「番茶ですが」といつて、へりくだつた言い方にもなる。

番茶は新茶に対して二番目、三番目に摘んだ茶であり、摘採時期が晩おそいという意味で晩茶とも書かれた。作り方は高級な煎茶と同じでも、商品としての評価は低い。

ところで、今のよう煎茶の製法が確立し、普及し始めるのは江戸時代中期である。それ以前から日本各地でじつに多様な茶が作られていた。たとえば、天日で乾燥させただけだったり、蒸してから桶に漬け込んで発酵させたりと、その製法の系譜は東アジア各地の茶につながっている。番茶はこれら種々雑多な茶の総称といつてよい。

しかし売れる商品として均質性や味わいの深さなどが求められれば、伝統的な製法による粗放な番茶は規格外である。

日常語の歴史

14

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

ゆえに番茶という言葉がそのまま安価な茶の代名詞にされてしまった。

日本の茶の歴史は茶の湯の発展として語られてきたが、番茶の実態を知れば、もつと豊かな茶の歴史が明らかになる。すでに戦国時代末期、来日したポルトガル人たちは、当時の

茶に二つの階層性があることを認識していた。マツチャ（抹茶）は上等な茶、パンチャは「上等でない普通の茶」（邦訳日葡辞書）であり、庶民は茶を煮出して飲んでいと記録している。超高級茶を使う茶の湯は非日常の世界、その対極に庶民の日常茶としてのパンチャがすでに存在していたのである。現行の煎茶は、両者の製法のいいとどりをした新商品として開発されたものだ。

今でも屋敷地や畑の境界に植えてある茶を摘み、自家製の番茶を愛飲している年配者がたくさんいる。買ったお茶は飲むと眠れなくなるが、うちのお茶は何杯飲んでも大丈夫だ、そんな味わいを楽しむ庶民にとつて、番茶こそ文字通り日常茶飯の茶である。

（中村羊一郎・民俗学者）

——このたび二〇一四年から続いている国文学研究資料館編アーカイブズ研究三部作の三冊目『近世大名のアーカイブズ資源研究——松代藩・真田家をめぐって——』が刊行となりました。前作までを総括しつつ、アーカイブズ研究についてお話をうかがいます。

●アーカイブズ研究(学)とは

そもそもアーカイブズとは何か？ 近年広く知られるようになりましたが、「アーカイブズ」には複数の意味があります。文字資料を中心とする記録史料(記憶遺産)の意と、その記録史料を管理する保管所(図書館など)、そして記録情報を管理公開する機能の意でも用いられます。

これに相当する言葉は、日本にはないわけですが、たとえば、「頭」などは、「頭が良い」、「頭がデカイ」などというように、中身の質や機能、それから人体の部位を指す場合があり、それが違和感なく、文脈のなかで使い分けられています。「アーカイブズ」もまた、そのような複数の意味をあわせもつ言葉であり、そういった意味でも、記憶・蓄積という機能面でも、「社会

ていーたいむ

人の記録が示すもの ——アーカイブズを学ぶ——

おとも かず お
大友一雄

(国文学研究資料館・研究部・研究主幹)

の「頭脳」的な役割の一部を担う存在ということもできるのです。

もちろん、情報の活用は人間が判断すべきことです。その学問は、社会が必要とする記録情報を収集管理し、誰もが利用できるような仕組みの構築と具体的な実践の方法を論じることを目的とします。

——情報を活用するといっても、人間が残す記録史料は膨大なものですね

現在のアーカイブズ学では、記録史料の作成・利活用、そして保存公開にいたる諸段階のコントロールが大きな課題となっています。現代・未来の文書であれば、文書を発生させる団体などにおける記録管理(レコード・マネージメント)との連携も強く意識されます。

過去に蓄積した記録史料の場合も同様であり、作成当時の記録管理が重要です。今日、記録史料の保存管理方法は、様々であるともいえますが、それらが一定の管理下に置かれれば、一般には目録作成、保管措置、閲覧公開、そして現在ではインターネットなどでの画像公開などと段階を経ることになります。これらの作業

を実現するには、文書記録類が発生した段階の記録管理に関する検討が重要となります。それは全体的な文書システムの解明が基礎となることはもちろんです。

アーカイブズ研究は、あくまで実践のための学問です。以上のような記録管理に関わる検討は、モノをコントロールするために欠かせません。アーカイブズ管理は、モノそのものの管理とその情報に関する管理を通じてはじめて可能となります。そのため活動は、モノを保存し、平等な公開を実現するためのものであり、その意義は、人々の権利や社会の平等性などを担保することに益することにあるといえるでしょう。

もちろん、地域の歴史や社会の発展を後付け、未来を展望するための情報基盤を整備するのに欠かせない学問といえます。

——比較的新しい学問なのでしょうか

アーカイブズ管理の考え方は、社会全体の情報技術の進展とも関わって、一九八〇年代頃から急速に変化してきました。また、それは社会のグローバル化のなかでの世界的な趨勢でした。

卑近な例ですが、国文学研究資料館は、前身の史料館が開館した一九五一年以来続けてきた「近世史料取り扱い講習会」を、一九八八年度には「史料管理学研修会」に、二〇〇二年度に「アーカイブズ・カレッジ」に改変しつつ継続してきましたが、これは先のような動向を踏まえ、専門職（アーキビスト）に必要な知識を提供することを目指した結果ということもできるでしょう。

こうしたいわば時代のなかでの変化は、アーカイブズ学だけでなく、図書館学・博物館学などをはじめ、多くの学問分野で見られたことです。アーカイブズ学は記録史料を守り伝えるための学問として、さまざまな団体や個人が関心を示しています。

アーカイブズ学は、今日、組織学・歴史学・保存科学・情報学など関連分野との連携を必要としています。保存対象も広がり、記録媒体も進化しており、学問の枠組みも大きく変化してきました。以上のようなことでいえば、どの国でも似たようなことが起こっているわけです。

最近では、自然災害、過疎化・高齢化などを強く意識した議論も見かけられますが、一方で、古い文書などは、文字も読めないし、汚いので廃棄を当然とする認識が広く見られます。現代文書に対しての歴史・文化的な価値をなかなか認識してもらえない状況です。また、権利や平等を担保すると言っても十分に理解されません。個人情報などが多い場合は、むしろリスク管理の問題から廃棄が指向されます。アーカイブズの理解についての進展が必要といえます。

●一連のアーカイブズ共同研究がめざしたもの

——今回の共同研究を始められたきっかけは何ですか

さまざまな集団による組織的な活動を通じて、「アーカイブズ」が蓄積されることになりましたが、それは、どういった文書であるのか。いつ何処で誰が何のために作成したのか、地域史料はもち

ろん、行政や大学などの文書群においても解明が必要です。

アーカイブズを取り扱う際にはこれらの情報が欠かせませんが、日本では理論的な整理がなされてこなかった経緯があります。

情報技術の進展により、世界の人々が情報にアクセスすることが比較的容易に実現できる現在、実際に利用してもらうためには理論的な整理が欠かせません。その必要性はすでに指摘されてきたのですが、実践的な取り組みやそれらを踏まえた検討は必ずしも充分とはいえませんでした。

検討では、それぞれの記録管理システムについての言及が少なからず必要となりますが、この点についての言及も限定的であったように思います。いかなる時代や地域の文書であれ、その作成・利用にはさまざまな決まりが存在したはずです。そのルールにしたがって文書は発生しているわけであり、そのシステムの解明は残された文書の存在を考える上でも欠かせません。

このようなことを考えて、アーカイブズ所蔵機関や大学の関係者と一緒に議論を重ねてきた次第です。



——三部作の概要を教えてください

一作目では、記録史料群の構造をどのような方法で分析し、どう表示するか、近世・近代・現代などさまざまな記録史料群を取り上げ、現場の視点から実践的な議論を試み、ケース・スタディとして提示することを目指しました。また、実践的な取り組みの動向、関連するシリーズ・システムなどについても紹介しています。

二作目では、幕府のいくつかの役所、また全国の近世大名のもとに蓄積した記録史料群を手がかりに、それらが同時代にどのように作成・利用・管理されたのか、文書管理システムのあり方とそのシステムの史的展開を追究しました。多くの研究者の方々に参加いただき、諸藩の動向を比較的に扱うことも可能になったと思います。そして今回の三作目では、信州松代藩にしばって、一つの藩内の色々な役所・階層における文書の発生から管理・伝来といった一連の動きを解き明かそうと試みたのです。

●組織・時代によって異なる文書管理のあり方

——なぜ真田家文書だったのでしょうか

松代藩・真田家文書は、真田宝物館に一万七〇〇〇点余、国文学研究資料館に五万五〇〇〇点余と分かれて保存されており、前から研究が続けられていました。真田家文書には極めて多くの文書が残っており、大名文書や関連文書に関わる当時の記録管理

システムを考えるには最適な文書群と考えられます。とくに真田博物館の文書では、当時の保管状態もよく残っていました。

共同研究を開始する段階では、国文学研究資料館の収蔵分については目録の刊行も終え、データベースで目録を公開していましたが、時間の経過とともに曖昧な点も見つかったため、史料を閲覧に供する側として、文書群理解を深めることが必要と考えられたのです。

太田尚宏さんが家老日記について検討していますが、真田藩に伝来したものの大半は明治初期に焼失してしまい、現存する四〇〇冊余は焼失後に家老を務めた家々から真田家に提供されたものということです。家老日記の作成・利用などを考えるうえで、また、家老日記を利用するうえでもこのような分析は欠かせないといえるでしょう。これらは今回明らかになったことです。

また、伝来や保管状況から得られる情報にも注目しました。今回、真田博物館に残る保存容器を共同で調査し、文書群の作成・伝来を明らかにすることができました。工藤航平さんがまとめており、真田家文書を理解するうえで基本的な研究になったと思います。なお、この作業は、真田家が過去に実施してきた管理用の目録の成果も踏まえています。この研究に限られません。多くの先学の積み重ねがわたしたちの研究の土台になって



大友氏

いることは言うまでもありません。

——真田藩文書群の共同研究を通して全体ではどのようなことがわかったのでしょうか

一つの藩を対象に老中・代官・町年寄などの色々な部署での文書の動きをみてきたことで、当然といえば当然なのですが、具体的なレベルでは部署によって文書管理のあり方が大きく異なることが判明しました。当時の組織体制の問題と関わるのが考えられます。近代のように上から統一的に基準が設けられた文書とは異なり、各部署の独立性が違いの源泉なのかもしれません。これは真田家文書に含まれる幕府老中職文書などを検討していても同じ思いに駆られます。均質化の動きは時代的ななかで強まると思いますが、各大名家はその役割を責任をもって請け負っているというような状況も認められます。

家老日記が藩と同時に各勤務者の家に残される点もそのようなことと関連していると思われれます。前近代の組織のあり方と近代以降の組織のあり方を通時的に検討する場合には、様々な点で注意が必要と思われれます。

「〇〇藩の研究」といった各藩の総合研究はよくみられるように思いますが、アーカイブズにこだわった藩の研究というのは、これまであまりなかったのではないのでしょうか。今回の研究が、今後のモデルケースになればと期待しています。

(二〇一五年二月二六日 於：京都市内)

本づくり 温故知新

本誌一〇〇号を記念して始まった連載第二弾。前号に引き続き、京都で活躍する、故くして新しい、本づくりの現場をご紹介します。

奈良時代から続く「きょうし経師」が現代で伝えるものは――

おおいり
大入

第二回にご登場いただくのは、昭和二六年（一九五二）創業「株式会社 大入」さん（以下、大入）。経巻や和本の仕立て、保存容器の制作から、国宝修理のための複製作成なども請け負う、故きを受け継ぎ未来へつなげる立役者の「職人」集団です。思文閣出版では、『花園院宸記』の成巻や、古書部での和本修復などでお世話になっています。

製本、修復、そして保存

二条城の東の筋を入ると現れる、堅牢な社屋。どこことなく前回訪れた便利堂さんと雰囲気似ています。

まずお邪魔したのは巻物などの修復作業室（写真①）。ここでは、金属イオンを含まない純水が出る蛇口や、紫外線を通さない窓、蛍光灯にいたるまで特別仕様で、修復中の作品環境に非常に気を遣っているのが分かります。畳敷きの作業室で、一〇名近くの方が修復作業をされていました。

これと別の部屋では、洋装本の修復も行われていました。もともとは和本の修復が大入の主な家業でしたが、洋装本を直してほしいという依頼に答えるため、若き日の大入達男社長は単独ドイツまで飛び、修復技術を勉強してきたそうです。その技術の結晶が、縦一〇〇センチ×横六八センチという超大型洋装本『アメリカの鳥』（復刻、雄松堂書店、二〇一四年）の製本。完成品が積み上げられた様子は（写真②）、書籍と言うよりはむしろ畳のようでした。木製の表紙が非常に重く、この開閉に耐えうる製本技術がいかに高度か、否が応にも察せられます。

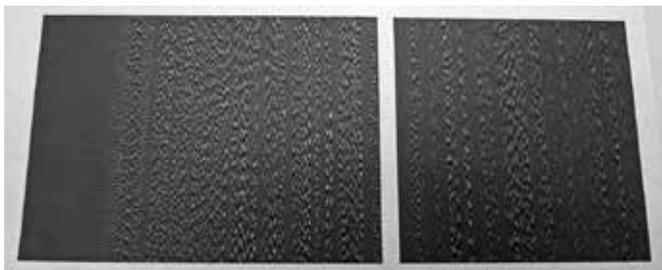
修復・複製造りとならぶ主要事業が、「保存」。「修理する、またもとの環境で保管する、また劣化する、では同じことの繰り返し返し。どのような保管の仕方がその物にとって一番良いのか」。試行錯誤のすえに確立された保存技術と知識により、お客さまには一点一点最善の提案



①修復作業室の様子。一見普通の部屋に見えますが、あちこちに作品を守るための工夫が凝らされています。



②積み上げられた『アメリカの鳥』（白い布の下に2列）。奥の机が小さく見えます。表紙が重たく、開くだけでも一苦労でした。



③和紙に印刷された波形。これを機械で読み取ると、音が再生されます（紙版・レコードのようなもの）。数千年後に機械が遺っているかどうかは謎です。

を行っているとのこと。

そんな大入の一階にある作品保管室は、見るからに頑強な造り。温度なども徹底管理かと思いきや、修復のため一時的に預かる美術品にとっては、部屋の外と差がありすぎるとかえって悪影響を与えるため、変に調節することはしないそう。管理方法は、状況に応じて考える必要があるようです。

この「保存」のための新たな選択肢として、現代に入り登場したのが「デジタル化」です。もともと大入は文化財をデジタル・アーカイブ化する事業にも力を入れており（出力＝複製事業はその副産物だそう）、大きな絵図などを一回で取り込むことが可能な大型スキャナーを持っていると聞いていたため、今回実際に見せていただきました。通常、大きな作品は分割して取り込んだのち画面上でつなぎ合わせてデータを作りますが、一回ですべて取り込み、人為的な調整過程を無くすことで、より原物に近いデータを残せるそうです。なお、別棟の専用建屋では、まさにスキャナーが稼働中。撮影は断念しました。

電子化の先、四〇〇〇年後の未来へ

大入の技術・こだわりの粋を集めたのが「声」を紙に印刷して後世に残す技術（写真③）。声の波形を特別に作製した最上級の和紙に印刷することで、遠い未来に音を遺すことができるという、大入社長一推しのロマン溢れる技術です！和紙やパピルスが、保存状態さえ良ければ一〇〇〇年単位で遺るとするのは、すでに実証された事実。運良く保存されれば、数千年後の子孫に自分の声を届けられるかもしれません。伝統ある和本の修理と、最新のデジタル化という技術をもちあわせる大入だからこそ実現可能な夢ですね。

思わぬところで融合した、故さと新しさ。どれだけ時代が変わっても、視点を変えればまた新たな利点があるようです。今回は芸艸堂さんにお邪魔します。お楽しみに。

株式会社大入 京都市中京区小川通二条上ル榎屋町61 ☎075-1212-0248代

比較史に救われ、個別実証に生きる

木きの下した光みつ生お

筆者は現在、近世日本の貧困史研究を専門としているが、近頃、自分の研究者生命は、比較史研究のおかげですっかり引き延ばされてきているなあ、と実感している。そうした感覚は、次の二つの自主的な研究会活動で自覚するようになった。

一つは、荒武賢一朗氏と太田光俊氏とともに長年、実行委員会方式で企画し続けてきた「歴史学フォーラム」(旧・近世史サマーフォーラム)という場である。歴史学フォーラムでは毎年、さまざまな時代、分野、対象地域(国)の研究者を招いて議論をかかわすとともに、実行委員会でも本番の討論に備えて、毎回六〇本近い論文を読みこなしている。いつも多大な刺激をそこから得ているが、比較史の大切さに気づくうえでとりわけ大事だったのが、二〇〇八年にご報告いただいた黒田明伸氏との出会いであった。千数百年の時間をあつさり飛び越え、世界中の事例を用いて貨幣の歴史的性格に生々しく迫る黒田氏の研究手法に、筆者はすっかり魅了され、それまで近世日本史の研究史整理だけに汲々としてきた自分が馬鹿らしく見えてきた。これをきっかけに、実行委員会での論文勉強会も完全に無国籍化され、日本語論文主体では

あるものの、世界のどこかに面白い研究視角はないかと、アジアからヨーロッパにいたるさまざまな歴史研究を貪欲に探索するようになった。歴史学フォーラムでの議論は毎度、自費出版の記録集で公表し、実行委員も研究ノートを執筆するようにしているが、まさか自分が、ベトナム史やロシア史の成果から、近世日本の小農(自立)像をとらえ直す小論を書くとは、この研究会を始めた十数年前には思いも寄らないことであった。

比較史の重要性を教えてくれたもう一つの場合、谷本雅之氏、飯田恭氏、荒武賢一朗氏と進めている、公共財供給の歴史をめぐる共同研究会である。そこでは、市場経済に生きる人びとが、自らの生活を維持していくうえで、非市場的要素はいかなる意味をもったのが眼目とされ、近世日本をベンチマークとして、税金は何に投下されていたのか、インフラ整備は誰が担っていたのか、といったことを長期的、比較史的に検討している。筆者の役割は、貧困救済の比較史から右の課題に接近することにあるが、恥ずかしながらこのとき初めて、イングランドを筆頭とするヨーロッパの膨大な貧困史研究の成果に接することとなった。救済費

や受給者数の変動データを表やグラフでバンバン出し、計量的に迫ってくる向こうの研究にたじろぎ、そのたびに「近世日本ではあり得ない」と本の余白に書きなぐったが、この経験によって、近世日本で作成された救貧関係史料の性格、および村の自治（村請）によって支えられる公的救済の意味合いを深く考えられるようになったのは、大きな収穫であった。

加えて、近世日本では、救貧のみならず公共財供給のあらゆる場面で、村の自治が決定的な意味合いをもっていたことにも気づかされた。いわば、「村請の世界史的位置」を自覚するにいたったわけで、そうなると今度は、村請の誕生と普及を可能にした一四世紀以来の領主制の特質が気になり出し、中世日本の荘園制や明治初年の秩禄処分の研究史を勉強し直したり、中近世日本の領主制とはおよそ異なる姿をみせる近世東ヨーロッパの領主制（グーツヘルシヤフト）研究から、近世日本社会の特徴を逆照射するようにになった。この作業で一番気になっているのは、実は、日本の領主は領地を「所有」していたのか、という結構古臭い課題なのであるが、あまり人が議論しなくなった問題を、比較史の目線で甦らせ、本棚でホコリをかぶっていた研究書を引っ張り出し、学部生以来二十数年ぶりに『平安遺文』や『鎌倉遺文』をひもとく作業は、なかなか愉快なものである。

このように、ここ数年の筆者は、比較史研究のおかげで生きながらえ、ワークシヨップや国際学会で英語報告をしたり、英語ペーパーを書く機会にも恵まれた。なんだか昨今流行りの「グ

ローバル」化とやらの波に乗っかっていただけかもしれないが、皮肉にもこの経験で自覚できたもつとも重要なこととは、個別実証研究をやり続けることの大切さ、であった。自分の意思をもつとも明確に伝えられる言語（筆者であれば日本語）によって、たえず地道な基礎研究を推し進め、自分で「絶対に引けない一線」実証」を数多く持つておかなければ、結局のところ、まともな比較史の議論など出来っこないのだ。それは、報告・討論や論文での使用言語が日本語であれ、英語であれ、同じことである。そんなことを考えながら、日々、文書整理をしたり——思文閣出版からこのほど刊行した『今村家文書史料集』もその一環——、論文を読んだり、原稿執筆にいそしんだりしている。

（奈良大学文学部准教授）

天皇か、徳川か——慶応四年の政権選択

宮間純一

会津が天下の雄藩を以て称せらるゝに拘らず、其亡ぶるに方

つて国に殉ずる者僅かに五千の士族に過ぎずして、農商工の庶民は皆な荷担して逃避せし状を目撃し、深く感ずる所あり、

憂国の至情自から禁ずる能はず、因て以為らく会津は天下屈指の雄藩なり、若し上下心を一にし、戮力以て藩国に尽さば、

僅かに五千未滿の我が官兵豈容易く之を降すを得んや

『自由党史』（板垣退助監修、宇田友猪・和田三郎編、一九一〇年）の第一編第一章にあるこの一節は、慶応四年（一八六八）の戊辰内乱で「朝敵」とされた会津へ攻め込んだ板垣退助の所感である。最激戦地となった会津の様相を語った右の言説は、これまでもいくどか引用・紹介・講評されてきた有名な一文である。要は、「国」のため、「官軍」と戦う武士たちに領民は協力しなかつた、もし士民が一枚岩であればかくもたやすく会津を攻め落とすことは出来なかつたであろう、と板垣はいふ。

『自由党史』の言葉を頭の片隅において一次史料を読んでいると、合点がいくこともある。会津から東京に送られた二つの書簡を紹介しよう。二点とも神奈川県立公文書館が所蔵する「山口コ

レクション」に含まれる史料である。

一つは、新政府軍の大軍監として会津に赴いた香川敬三の書簡である。香川は、書中で「会城中ニハ女子マテナキナタヲ以テキリ出シ」と武器を手にとって戦場に臨む武家の女性がいたことに加え、「女子、老婦共其場（戰場——宮間註）ノ傍迄来リ、我子ヲサシ殺シ、自ラノンドヲ突キ」とわが子とともにみずからの生命を絶つ女性さえいたことを報じている。この書簡からは、武士子どもが「国」に殉じて生命を失つてゆく戦場の異状さ、悲惨さが如実に伝わってくる。

もう一つは、同じく会津に在陣していた桐野利秋（中村半次郎）の書簡である。桐野は、戊辰内乱に際して東征大総督府の軍監となり、会津攻撃にも参加した。桐野は、「思之外民心も官軍ニ染付候模様」と会津の領民が想像に反して「官軍」に同調していることと鎮台府（新政府の軍政機関）へ報告している。板垣を含む前線の新政府軍上層部は、民衆が意外に反抗せずむしろ協力的で円滑に占領を進められそうだと認識していたようである。

なるほど。右の二点の史料からは、板垣がいうように、武家と民衆の間に温度差がある会津像と「国」に殉じようとする民衆像を切り取ることができるかもしれない。他の史料からは違った見方をすることもできるが、板垣の見解に一面では賛同できる。だが、つづけて「斯の如く庶民難を避けて遁散し、毫も累世の君恩に酬ゆるの概なく、君国の滅亡を見て風馬牛（うまご）の感をなす」と述べるのにはまったく同意しかねる。板垣は、会津の領民は領主松平家に対する長年の恩に報いようとせず、その滅びるありさまを見てもまったく無関心であったというのである。果たして本当にそうだったのだろうか。私は、会津を含む内乱に巻き込まれた地域の民衆は積極的か消極的かは別にして何らかの政治判断を主体的に行つたと理解している。細かい実証を示す紙幅の余裕はないが、板垣が見た会津の民衆の場合、藩の滅亡を傍観していたのではなく、むしろ葛藤の末に旧権力よりも新政府を支持する意思を表示したのではないかと考える。

会津だけではなく同時期の社会全体に広く目を向けても、武士たちと一体となつて領主のために行動しようとする民衆、旧幕府抗戦派を支援する村落指導者層、「勤王」の意思を表明して新政府軍に従軍を希望する社会集団など、決して「国」「国」は「藩」である場合も、いわゆる「国家」である場合もある）の行く末を座視しているわけではない、能動的に行動する人びとの動向を各地で発見することができる。

たとえば、鳥羽伏見の戦い後に「朝敵」とされた伊予松山藩では、

藩主松平（久松）家の存続のため領民たちが赦免歎願運動を起した。江戸市民の中には、徳川を支持し、天皇や「官軍」に強い抵抗意識を有する人びとが多数いた。また、旧幕府抗戦派の支配下に置かれた江戸周辺の村々では、旧幕府軍を支援し、「徳川再興」のため軍事行動に身を投じる農民たちがいた。安房国の神職を中心として結成された神風隊は、武装化して新政府軍の傘下に加わろうとした。以上のような事例は、他にも数多くあげられる。

内乱の渦中であつた人びとは、新政府・旧幕府両陣営から「勤王」か、「佐幕」かの政権を選択することを迫られた。新政府や旧幕府が通行・駐屯した地域の人びとは、直面した権力に対してどう振る舞うべきか、判断したのである。どちらにも最低限協力してやり過ごすのか、全面的に支援するのか、はたまた抵抗を示すのか。ある人物／集団は、従来の秩序を保つべく天皇・新政府の受容を拒み、旧幕府や既存の権力を支持した。一方では、近世社会では成し遂げられなかった願望・欲求を達成しようとする積極的に天皇權威に接近する人びとも存在した。その選択の基準は、みずからの利害にもとづく非常にしたたかなものである。

戊辰内乱は、維新史上の画期であつただけでなく、内乱に関与したあらゆる人びとに天皇か、徳川かの政権選択を求めた。そのため、この時期にはさまざまな身分が政治意識を発露し、実に多様かつ複雑な思想が顕在化・交錯したのである。その結果生まれた「国」とはいかなるものだったのであろうか。板垣とはまた違った視点から考える必要がある。（国文学研究資料館准教授）

「いけばな」と「花道」

日本の伝統的插花文化は、一般に「いけばな」と呼ばれる。しかし、この呼称にはなかなか複雑な問題がひそんでいる。

まず「いけばな」といつてもその表記は「いけばな」「いけ花」「生け花」「生花」「活花」「活け花」等々、多岐にわたっている。また近世以前は「插花」や「瓶花」、さらには「五景花」と書いて「いけばな」とよむ例もある。この多様性は、今日の研究者を悩ませている。論文等を検索する場合に、きわめて非効率なのである。近年、「国際いけ花学会」では「いけ花」という表記に統一することを進めているが、強制力のあるものではなく、過去の文献史料名を変えることもできない。

さらにもうひとつ、「花道」という呼称がある。「華道」とも書かれる。先の検索に関連して言うと、「花道」で検索すると「花道」も該当してしまうので「華道」の方が都合はよいのだが、今日では「花道」の方が多く用いられる傾向にあるようだ。「華道」と「花道」の書き分けに関しては、大きな意味はない。近世以前の史料では同じ文章に混在していることもある。

では、「いけばな」と「花道」の関係はどうであろうか。これ

井上治

は「茶の湯」と「茶道」の関係と似ているかもしれない。まず歴史的に見てみると、「花道（華道）」という言葉が用いられるようになったのは一七世紀後半あたりからとされている。現存する史料では、貞享五年（一六八八）刊行の富春軒仙溪による『立華時勢粧』で用いられたのが最も古い例とされる。とはいえ、「花の道」、「この道」といった語は室町期からすでに見られるので、実際にはもう少し以前から用いられていたであろう。

「いけばな」の方はかなり複雑である。室町期の伝書（とされる）『仙伝抄』に「生花」という語が出ているが、これは「死花」と対置される言葉である。ここで言う「生花」とは、季節を先取りする花であり、「死花」とは季節遅れの花である。したがって插花文化の総称として用いられているわけではない。そもそも当時の公式の插花は、「たて花」と呼ばれるものであった。「生ける」のではなく「立てる」花である。この「たて花」に関連して「いけばな」という言葉が使われる例として、室町時代後期の『池坊専栄伝書』がある。同書では「生花の事、さたまり〔定まり〕たる枝葉もなし」として、型をもつフォーマルな「たて花」に対して、

自由でカジュアルな挿花を指している。具体的には、茶室の花であろう。したがって、ここでも「いけばな」は挿花の総称ではなく、「たて花」に対する語である。当時の茶書でも、「茶花」を「いけばな」と呼んでいる。

「いけばな」の概念に大きな変化が生じるのは、江戸時代の後期である。その前に「たて花」の動向を見ておくと、近世初頭以降、「たて花」は大型化・豪華化したのだが、この大型化した「たて花」を「立花（立華）」と呼びならわしている（これもまたややこしい呼称なのだ）。たとえば挿花の丈で見ると、「たて花」では花瓶の一倍半であったのが、「立花」では二倍半から三倍、あるいはそれ以上になっている。先に言及した『立華時勢粧』も「立花」の書であるように、元禄期あたりまでこの「立花」が大いに流行したが、江戸時代中後期に流行の翳りが見える。その中で代わりが出てきたのが、この「立花」に對置される様式としての「生花」である。この「生花」は、「死花」に對しての「生花」とも、「茶花」としての「生花」とも異なる。「立花」の小型版のような、つまり一定の型をもった挿花である。「立花」が基本的に七つの役枝（池坊専栄のいう「さたまりたる枝葉」）を有したのに対し、「生花」は三つ（いわゆる天地人）である。この「生花」が江戸時代後期以降、たいへんな流行となる。

「いけばな」が挿花全体の総称として定着するのは、近代以降であろう。その背景にはこの天地人の「生花」の流行が大きい。つまり、元來挿花文化の様式の名称であった「生花」が挿花全

体の呼称となった。したがって、今日の用例としては、「いけばな」の中に「立花」もあり「生花」もあるということになる。その結果、様式としての天地人の「生花」は、今日では「せいか」あるいは「しょうか」と音読されるのが通例である。「いけばな」と呼ぶと挿花全体の総称と紛らわしいからである。

この「いけばな」の二重性に関しては、近代以降に総称として「花道」を使っておけば問題は生じなかった。しかし、そうはできない事情があった。文明開化の風潮の中で一時的に求心力を失った「いけばな」は、自らを「芸術」として再定義した。そしてその「芸術」概念は前近代的な「芸道」性を否定する方向で定義されたため、「花道」とは名乗れなかつたのである。昭和八年（一九三三）に重森三玲や勅使河原蒼風らによって起草された「新興いけばな宣言」は、この方向を明確に示す指針であった。そして、二〇世紀中後期における「いけばな芸術」の流行が示すように、この方針は大成功したと言つてよい。しかしいくつかの問題も残した。もっとも重要な問題は、たとえば茶道が禅との結びつきを学術的に深めて思想的な発展を遂げたのに対して、作品の制作に特化した「いけばな」がその方面でまったく停滞したことである。

今日、多くの花道流派が二〇世紀中後期における大流行時の花道人口を前提とした組織・体制の転換を迫られている。同時に学術の観点からも、失われた期間を補完する作業が必要であろう。

（京都造形芸術大学准教授）

日本思想史研究の国際化のために

竹村英二

リュシアン・フェーブルは、一九世紀末に動脈硬化をきたして

いた実証主義史学を痛烈に批判し、歴史学を社会科学のさまざまな方法と切り結ぶことでその「革新」を精力的に推進した碩学であるが、そのフェーブルも、厳密な史料批判を伴わない歴史研究については彼一流の至極絶妙なレトリックをもつて断罪する（たとえばA・J・トインビー『歴史の研究』などは「手品師」の「巧妙な欺瞞の手法」の産物と痛罵されている）。

奇しくも現在のアナール系につらなる研究の多くには、まさにフェーブルが辛辣に批判した類の、地道な実証研究を踏まええないものが多いのはなんとも皮肉である。

フェーブル、そしていわゆる「アナール学派」の共同創始者の一人でもあるマルク・ブロックも、ともに「歴史学の革新者」としてのみ賞揚されがちだが、二宮宏之などもうのように、彼らの知的基盤はかなりガチな実証史学である。彼らはいくまでそれを底辺にもちながらの学問の建設的相互乗り入れを唱導していたのだが、とくに昨今のカルチュラル・スタディーズや文化史といった分野の研究には、特定の理論体系に史料を埋め込む姿勢が

顕著であり、いささか残念な必然ともいえよう。

そしてこの状況がまさに、実証史学と社会科学諸分野との創造的接合が阻害され、両者の学問的反目、あるいは相互等閑視の状況が現在においても続いていることの大きな原因である。

なぜこんな、「世界のなかの日本研究」とはまったく畑違いの話からはじめたかという、たとえば筆者の研究領域である日本思想史においても、社会科学のさまざまな方法やあたらしい理論ないし巧妙なレトリックで古典テクスト理解に新機軸をもたらさんとするも、丁寧なテクスト自体の精査を蔑ろにし、結果、古典をもてあそぶに終始する研究者が存在する一方、逆に史料主義を偏重するあまり袋小路に入ったまま出てこられず、また這い出ようとする努力の必要性すらまったく意識せず、相も変わらず定型的な研究に従事する研究者が、多数派として存在する状況が続いているからである。そしてこの状況は、二〇世紀前半に、フェーブルやブロックらが抱いていた構想と異なった性質をもつに至った現在のアナールと、保守的ないし正統的な歴史学の唱道者との不幸な乖離と瓜二つである。

いまもむかしも、日本人は、ひとつのことを事細かく長期にわたり勤勉につとめるのが得意であり、日本思想史という研究分野においても、ある面それを如実に反映してか、日本研究者によるものは、その文献学的、実証的水準の高さが際立つ。しかし、緻密な研究成果を異なった思惟の周波数をもつ研究者のそれと交錯させること、あるいはまた、効果的な学術情報の海外への発信となると、やはり未だ不十分であると筆者は思う。

一方、外国人研究者による日本研究に目を転じると、東アジア圏内諸国、諸文明圏との比較研究はいうに及ばず、広角的に遠くイスラームやヨーロッパ、さらには中南米の文明研究をも視野に入れ、そこで実践される視覚や分析手法を適宜接合／交錯させ比較研究なども活発に行なう研究者も散在する。

彼らとの、とくに方法的、視座的側面の賦活をめざした継続的な学術交流は、まちがいでなく日本人研究者に有益なものだと思える。だが、昨今増加の一途をたどる「国際シンポ」のたぐいの件数とその表面的活況ぶりとは裏腹に、本質的次元で史料、方法について密に討議する環境は必ずしも整ってはいないのではないか。

理由はいくつかあろう。たとえば、方法的、視座的な幅広さをもった外国人研究者は、えてして、理論主導に先走るあまり、ていねいに史料自体にむきあう姿勢の欠如が顕著であったりする。個々の儒者におけるテキスト考察過程の詳析とその方法自体のつぶさな客観的考察を基盤とし、視座や方法をそこからつむぎ出す

という作業を経ることをせず、何らかの即製の理論をふりかざして大上段な議論に終始することからは、その時代の思惟様式の粗野な素描以上のものはつくりえないのは論を俟たない。このような「理論主導型」の諸研究に対し多くの日本人の思想史研究者は、はなから拒絶反応を示すことがよくある。

もちろん、人数的には少ないが、日本の古文、古漢籍の渉猟・読解において高い能力をもち、さらに社会科学的方法にも通暁する質の高い外国人専門研究者も存在し、彼らとの協働作業は間違いないく豊饒な日本研究の進化を促すと思われるが、いまだにあまり十分ではないような気がする。

このような問題を一挙に解決する処方箋など存在しないが、どうしても内向きな姿勢を糾さない日本人研究者の「ハビトゥス」は是正にむけた「しくみ」として、異分野の研究者同士の交流、親睦を可能せしめる「academic body」または「private association」である「コモンルーム」の制度を導入することも一案だろう。オックスフォードやケンブリッジに存在するこの制度は、実にさまざまな分野の研究者との交流が日々「強制」される装置であり、縦割り組織における厳格なディシプリンの醸成と異分野交流の「日常化」を可能せしめるものである。

(国士舘大学21世紀アジア学部教授)

史料

探訪

62

谷文晁一門・船津文洌

「四季草花図小襖」

鶴岡明美 (昭和女子大学 准教授)
多田文夫 (足立区立郷土博物館 学芸員)
小林優 (同)

展覧会と船津文洌の資料 現在の足立区内にあたる地域に、琳派
絵師鈴木其一と交流した谷文晁の門人がいた。江戸近郊・上沼田
村(現 足立区江北)の豪農・船津文洌(一八〇六〜五六)である。

文洌は師・文晁の写山楼ゆかりの粉本・模本、本画と共に自身の
作品や縮図、そして多くの日記や記録を残した。現在、これら新
発見となる作品や諸文献は、足立区立郷土博物館の展覧会「美と
知性の宝庫 足立——酒井抱一・谷文晁とその弟子たち——」(五
月二十二日まで)で紹介している。

そもそも江戸下谷の文人たちと足立の文人たちが結ばれたきつ
かけは、江戸琳派の酒井抱一が俳諧の友とした千住宿(現 足立
区千住一帯)の建部巢兆と親交を結んだことにあった。巢兆は戯
作者の竹塚東子(足立区竹の塚の人)ら足立の文人たちを「連」
でまとめ、当世の文人文化の中核を担っていた抱一ら下谷の人々
と親しく交流した。その後、抱一の高弟、鈴木其一に師事した千
住宿の村越其栄と向栄が画業を遺し、文晁門下の船津文洌や谷文
一(一世)と谷文逸(二世文一)とも交流するなど、足立の地で
流派を超越した重層的な交友関係を結んだのである。足立区立郷

土博物館では、継続して地域の美術・歴史・民俗資料を対象とし
た文化遺産調査を実施しているが、そうした中、以前から交流し
ていた船津文洌家から多くの資料を調査する機会を得、今回の展
覧会へとつながったのである。

新発見の資料には、絵画作品と共に文洌の日記や「註文簿」、谷
一門の書簡など多くの文献が含まれていた。ここで紹介する文洌の
「四季草花図小襖」の制作経緯もその日記の中に記されている。注
文主は足立郡小右衛門新田の豪農、日比谷新右衛門で、最初に新
右衛門が嘉永六年(一八五三)三月三十日に文洌を訪ね、四月七
日には使いと共に襖を持参、文洌は五月一日に描きあげ日比谷家
に持参している。屋敷の設えを改めたらしく、日記を見ると板戸
絵も注文していたようだ。日記や注文簿には他に其一や文晁一門と
の交流も記され、絵師の日常や作品成立の背景を探りうる実態が
見えてくる。今回の特別展は歴史や民俗など各分野から文献類と
画業を調査しており、新たな研究課題も多い。博物館では本展覧
会へのアプローチについて武蔵野美術大学の玉蟲敏子氏らと共に
公開研究日——スタディデイ——を五月十五日に開催する。(多田)

文人絵師・船津文洩作 四季草花図小襖 本作品は、文晁一門と抱一一門との交友による、流派を超えた影響関係を物語る、本展覧会を象徴する一作となっている。

船津文洩は、絵師であると共に寛永寺領七か村（現 足立区江



船津文洩「四季草花図小襖」 紙本金地着色 四面 縦29.0×横218.0cm

北地域周辺）の重役を務める豪農であり、実名を久五郎重許といった。詳しい入門時期は不詳ながら、谷文晁に画を学び、文政九年（一八二六）に「文洩」の号を、その二年後に「菜菔」の号を文晁から与えられ、文晁一門の絵師としての活動を本格化している。「四季草花図小襖」を制作したのはそれから約二十五年後のことであり、文洩の画業では晩年に相当する。その制作時期および経緯は、船津家に伝来する文洩

の日記から前述のように知ることができ、以来今日に至るまで注文主である日比谷新右衛門家に代々伝来してきた。華やかな金箔地の四面に極彩色で描かれた四季の草花、金で引かれた葉の葉脈など、琳派の絵師たちに好んで用いられる表現が突き詰められており、文洩が「文晁門下」という枠に囚われず、文人相互の交友の中で、超流派的に琳派の技法を学習していたことを証明している。また本資料は同時に、下谷の文人たちが足立の地で活動する中で、抱一・其一らの琳派様式による作品がこの地の人々の生活空間にも受容され、求められるようになったということをも、物語っているのではないだろうか。（小林）

画派を超えた交流を検証する意義 江戸時代後期の都市江戸において、例えば「狂歌連」のように、身分や職業の枠組みを超えて人々が集まる場が生まれることで、様々なネットワークが誕生していたことはすでに知られているとおりである。絵画の世界においても、画派という閉じたサイクルを超え、様々な画風の学びに基づく制作活動が豊かな実りをもたらしていたことが近年解明されつつある。文洩の師、谷文晁はまさにこの傾向を象徴する存在であった。

文晁は「八宗兼学」と称されるとおり、中国絵画・大和絵・西洋画など多岐にわたるスタイルの画を閲覧する機会を活かし、それらを貪欲に学ぶことで自己の作風を確立した。その学習の実態についてはこれまでも様々な形で言及されてきたが、研究の関心は中国や日本の古画、あるいは西洋画など、時間や空間の隔たり

を有する作品からの影響を検証することにもつばら注がれ、彼が同時代の絵画潮流とどのように向き合っていたかという問題について正面切って取り扱ってはこなかった。

そうした中、文晁が友人として親しく行き来していた抱一と、絵画制作の場においても密接に交流していたことを示す事例が近年見出されている。すなわち仏画の領域において、「弁財天図」や「白衣観音図」のように、同図様の作品を文晁と抱一の両方が手掛けている例や、今回の展示に出品された、両者間の模本・粉本のやりとりを示した抱一の文晁宛て書簡などである。

さらに文晁には琳派の作風に影響を受けた作品が認められる。一例として「武蔵野水月図」(個人蔵、「谷文晁」展、サントリ美術館、二〇一三年出品)があるが、またこれも本展出品作の一つ、文晁の縮図帖『菜菔^{さいぶ}図^ず』には文晁筆の琳派風四季草花図の写しが見られ、彼が自らの作画のレパートリーの一つとして琳派の画法を体得していたことがうかがえるのである。

日比谷家蔵「四季草花図小襖」は、このような文晁の琳派との交流が抱一との個人的な関係で完結することなく、弟子の世代である其一と文晁に継承されていたことを示す格好の作例である。今回の展示ではこのように、文晁一門と琳派の交流の実態が見えてきた。今後の調査においては、その系譜の一層の解明を通じて、こうした交流の場として足立という地域が果たした役割を再確認することになるであろう。

(鶴岡)

— MEMO —

足立区立郷土博物館

「江戸東京の東郊」をテーマとし地域の歴史民俗資料のほか浮世絵、近世近代の書画を収蔵。年数回の企画展で紹介している。

・住所 千120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

常磐線亀有駅から八潮駅南口行き

足立郷土博物館で下車1分

・TEL 03-3620-9393

・FAX 03-5697-6562

・休館日 月曜日(祝日は開館し翌日休館)

・開館時間 午前9時～午後5時まで

・入館料金 一般(高校生以上70歳未満) 200円

ほか無料

・ホームページ 「足立区 博物館」で検索

足立区文化遺産調査特別展

「美と知性の宝庫 足立」

酒井抱一・鈴木其一・村越其栄・松津文淵らの掛軸、屏風、書簡と谷一門の粉本・模本、文献資料など前後期で96点を展示。

・開催期間 3月13日(火)～5月22日(日)

・前後期展示替えあり

・関連事業 スタディデイⅡ5月15日(日)

詳しくはウェブサイトで

書評・紹介一覧 12～1月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事 [敬称略]
響きあう東西文化 (紹)『ふらんす』1月号	平家物語生成考 (評)『日本文学』64巻12号(平藤幸)	
近代日本の都市社会政策とマイノリティ (評)『ヒストリア』253号(佐々木拓哉)	陽明叢書 記録文書篇 法制史料集 (紹)『史学雑誌』125編1号	
在京大名細川京兆家の政治史的研究 (評)『古文書研究』80号(木下昌規)	前野良沢 (紹)『洋学史通信』25号(青木歳幸)	
緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く (紹)『洋学史通信』25号(青木歳幸)	万国博覧会と人間の歴史 (紹)「読売新聞」1/17	
角倉一族とその時代 (紹)『月刊 京都』1月号	室町幕府管領施行システムの研究 (評)『史学雑誌』124編12号(花田卓司)	
大正・昭和期の日本政治と国際秩序 (評)『日本歴史』811号(熊本史雄)	室町幕府の東国政策 (評)『歴史学研究』941号(植田真平)	
中世長崎の基礎的研究 (評)『古文書研究』80号(丸島和洋)	和食とは何か (紹)「京都新聞」12/8	
平安時代陰陽道史研究 (評)『日本歴史』812号(水口幹記)	(紹)「読売新聞」12/1	
(評)『古代文化』67巻3号(繁田信一)	(紹)『学校給食』67巻1号	

12月から3月にかけて刊行した図書

図書名	著者名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
俳句とスペインの詩人たち	田澤佳子著	1823-3 C3098	5,000	12
近代日本のユダヤ論議	宮澤正典著	1842-4 C3036	5,000	1
戊辰内乱期の社会	宮間純一著	1829-5 C3021	7,500	1
琳派 響きあう美 [二刷]	河野元昭著	1785-4 C3070	9,000	1
日本古代国家の農民規範と地域社会	坂江渉著	1787-8 C3021	9,000	1
廣瀬淡窓	井上敏幸監修／高橋昌彦編著	1817-2 C1023	2,500	1
今村家文書史料集 上巻 中世～近世編	今村家文書研究会編	1830-1 C3021	8,800	1
今村家文書史料集 下巻 近代編	今村家文書研究会編	1831-8 C3021	9,200	1
京都 実相院門跡	宇野日出生編	1835-6 C1070	2,000	2
平安王朝の葬送	龍谷寿著	1832-5 C3021	3,700	2
没理想論争とその影響	坂井健著	1834-9 C3095	8,900	2
江戸後期儒者のフィロロギー	竹村英二著	1838-7 C3021	5,500	2
織豊期主要人物居所集成 [第二版]	藤井讓治編	1833-2 C3021	6,800	3
中世京都の民衆と社会 [オンデマンド版]	河内将芳著	7003-3 C3021	8,800	3
崇徳院怨霊の研究 [オンデマンド版]	山田雄司著	7005-7 C3021	6,400	3
中世京都の都市と宗教 [オンデマンド版]	河内将芳著	7006-4 C3021	6,800	3
近世大名のアーカイブズ資源研究	国文学研究資料館編	1840-0 C3021	7,000	3
会沢正志斎書簡集	大阪大学会沢正志斎書簡研究会編	1828-8 C3021	11,500	3

12月から3月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
住友史料叢書	30	30	年々記 一	1827-1 C3321	9,500	12
住友の歴史			上巻 [三刷]	1703-8 C1021	1,700	1
京都大学史料叢書	14	15	吉田清成関係文書六 書類篇二	1818-9 C3321	21,000	1
技術と文明	38	38	二〇巻一号	1822-6 C3340	2,000	2
和食文化ブックレット	2	2	年中行事としきたり	1841-7 C1039	900	2

(表示価格は税別)

▼久々に市内店をまわり、閉店、棚替えなど、現状を目の当たりにし、驚愕しました。(江) ☆学会出店情報 小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

日本医史学会(広島県医師会館)

5/21(土) ~ 22(日)

美術史学会(つくば国際会議場)

5/28(土) ~ 29(日)

歴史学研究会(明治大学)

5/28(土) ~ 29(日)

日本文化人類学会(南山大学)

5/28(土) ~ 29(日)

茶の湯文化学会(名古屋文化短期大学)

6/11(土) ~ 12(日)

大阪歴史学会(関西学院大学)

6/26(日) 予定

◆お詫びと訂正◆

本誌一〇〇号の「思い出の一冊」で『西鶴の文芸と茶の湯』『御堂閔白記全註釈』に文章をお寄せいただいた長田光男様のお名前を間違って掲載してしまいました(16頁下段、28頁中段)。ここに訂正しお詫び申し上げます。

▼国文研アーカイブズ研究論集三冊目が刊行されました。今回のいいたいむでは編者にお話をうかがっています。歴史研究には欠かせない史料であり、我々ヒトの記憶でもあるアーカイブズの重要性を改めて考えてみませんか。(m) ▼最新京都名所のご案内、①將軍塚(昨春秋に一新)②岡崎(旧京都会館がリニューアル)③小社社屋(昨春秋に工事完了)……観光のついでにお立ち寄りください。(十六)

▼岡崎の追加。葺屋書店(小社京都本が充実、動物園(幅允孝さんの動物本棚が最高)(h)

▼今年(今年)は弊社が株式会社となつて四十年。出版業界も変革を迫られる時代ではありますが、芯となる「不惑」の部分は大変です。(Q)

▼今年(今年)は仕事を始めて一〇年目です。ずっと出版不況。これって不況なんでしょうか?(M)

▼昨秋からラグビーに夢中です。同僚から「にわか」に嘲笑されてもめげません!だって初めは誰しも「にわか」でしょ?。(き)

▼久しぶりに自宅のパソコンを起動したら、電源が入らない状態に。なんとかなりましたが、最近のスマホ頼りの生活に反省。(一)

▼表紙図版・駐日英国公使オールコックの將軍 拝謁(Illustrated London News, 15 Dec. 1860

／「幕末外交儀礼の研究」より)

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.101

2016(平成28)年4月25日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

箏篋の研究——東アジアの寺院荘厳と絃楽器——
中安真理著
【6月刊行予定】

浄土では自然と音楽が湧きおこり、仏の功德を謳っている——
寺院においてその音楽を象徴したのが、建築物に飾られた楽器である。
長く仏教建築を荘厳しながらも今では廃れてしまった絃楽器「箏篋」。
中国・日本の文献を博捜し、その実態を明らかにする。

序章
コト形絃楽器とは／風で鳴るコト形絃楽器「ウインドハープ」／箏篋三種／本書の構成

第一章 浄土の音楽
風で動いて鳴るもの／自然に鳴るもの／自然に鳴る箏篋／箏篋の特殊性
／美術作品にみる自然に鳴る音楽の表現

第二章 日本の美術作品にみる箏篋
堅箏篋／風首箏篋／金剛箏篋

第三章 臥箏篋—日本の仏教建築を荘厳するコト形絃楽器の源流—
先行研究／箏篋の発生／箏篋の形態／フレットをもつコトの図像資料／
文献史料にみるフレットをもつコト／朝鮮半島の玄琴の起源

第四章 日本における箏篋の漢字表記と雅楽寮での使用
漢字表記と助教詞による区別の有無／雅楽寮での使用

第五章 仏教建築を荘厳する「箏篋」の資料分析
文献史料にみる「箏篋」／美術資料にみる「箏篋」／考古資料にみる「箏篋」
—鳥羽離宮跡出土コト形木製品—

第六章 中国・日本における「風琴」「風箏」「風箏」
中国の詩文にみる「風琴」「風箏」「風箏」は風か／唐代の史料にみる「風
箏」／日本における「風箏」

第七章 仏教建築を荘厳する宝鐸の存在と音の意義
「鐸」の字義／インドの宝鐸／中国の宝鐸とその音／自鳴する様々な体
鳴楽器の音の意味／仏国土の宝鐸／日本の宝鐸と鐘

なかがやす・まり：一九七一年生。高野山霊宝館学芸員を経て、京都市立芸
術大学日本伝統音楽研究センター特別研究員。
▼A5判・二八〇頁／本体六、〇〇〇円

陽明文庫蔵舞絵〔舞楽散楽図〕・法隆寺旧蔵拵鼓
上野学園大学日本音楽史研究所編 日本音楽史料叢刊I
日本音楽史学の中核的拠点、上野学園大学日本音楽史研究所創設以来40年に
わたる研究の蓄積と成果を踏まえた影印叢刊。
【5月刊行予定】

▼A4判横綴・二五二頁／本体二、七〇〇円

天皇・將軍・地下楽人の室町音楽史
三島暁子著

天皇家・將軍家の笙の御師範として重要な役割を果たした地下楽人豊原氏の
南北朝期から約一五〇年にわたる活動に着目し、権威に密接にかかわった音
の文化を論じる。
▼A5判・三六〇頁／本体六、六〇〇円

古楽古歌謡集 陽明叢書国書篇 第8輯
土橋寛・岸辺成雄・福島和夫他解説

藤原氏嫡流である近衛家の陽明文庫の内から特に国文学に関係深いものを選
び、専門家諸氏の解説を得て写真製本として公刊した叢書。
▼菊判・三〇四頁／本体一、八〇〇円

神霊の音ずれ 太鼓と鉦の祭祀儀礼音楽
朱家駿著

祭祀儀礼の音をさぐるフィールドワークと象形文字に発した古代漢字（音・
楽・鼓など）の分析を重ね合わせることで神霊と音のさまざまなすが
たを明かす。
▼A5判・一九六頁／本体三、五〇〇円

正倉院宝物と古代の技
木村法光著

長年、正倉院事務所保存課に勤務し、正倉院宝物の調査・研究、保存・管理
に携わってきた著者の研究成果を一書にまとめる。
▼A5判・五二二頁／本体一五、〇〇〇円

京都実相院門跡

企画 京都府京都文化博物館
京都市歴史資料館

建築・庭園・絵画・彫刻・文学・史料——それぞれの専門家がその深遠な世界をご案内



内容

- ごあいさつ (実相院門跡 原敬泉)
 〈カラー図版〉 障壁画・杉戸絵 / 大雲寺絵図 / 京御殿御指図 / 木造不動明王立像 / 如来荒神像 / 『仮名文字遣』ほか収録
- 〈論考〉
- 総論 洛北岩倉と実相院門跡 (宇野日出生・京都市歴史資料館)
 第一章 構造のけしき——貴族邸宅の遺構 (日向進・京都工芸繊維大学名誉教授)
 第二章 空間のよそおい——門跡寺院特有の庭 (今江秀史・京都市文化市民局)
 第三章 美のしつらい——実相院の襖絵 (奥平俊六・大阪大学大学院教授)
 第四章 信仰のかたち——不動明王立像をめぐる (井上一稔・同志社大学文学部教授)
 第五章 文事のせかい——洗練された教養・風雅な生活 (廣田収・同志社大学文学部教授)
 第六章 史料のかたち——中世の実相院と大雲寺 (長村祥知・京都文化博物館)
 大雲寺力者と天皇葬送 (西山剛・京都文化博物館)
 門跡の生活 (佐竹朋子・柳沢文庫)
- 年譜 実相院門跡

〔2月刊行〕

▼B5判・一四四頁／本体二、〇〇〇円

園城寺の仏像 第一巻 智証大師篇

天台寺門宗教文化資料集成 仏教美術・文化財編1
 園城寺監修 / 園城寺の仏像編纂委員会編

本書には、園城寺の智証大師像四体と、京都府下二寺、生誕地香川県二寺それぞれの大師像について、全身の正面・左右側面・左右斜め・背面・頭部の正面・左右斜め・左右側面・背面など多数のカットを掲載。それぞれに調書も付し、智証大師像を詳細にわたって理解できる内容となっている。図版はすべてカラー掲載。全四巻。半年に一回刊行。

〔5月刊行予定〕

▼A4判・一六六頁／本体二二、〇〇〇円

近江の古像

高梨純次著

近江の仏像に関する展覧会の企画や調査・研究に三〇年以上にわたって携わってきた第一人者が、主に八世紀から一二世紀の近江の古仏について、その研究成果を集成する。

▼A5判・四二〇頁／本体九、〇〇〇円

石山寺の信仰と歴史

鷲尾遍隆監修 / 綾村宏編

石山寺の信仰・歴史・美術・文学・経典を、第一線の研究者が、豊富なカラー図版とともに解説。オールカラー、図版一五〇点を収録。

▼A5判・一八〇頁／本体一、八〇〇円

仏教美術を学ぶ

中野玄三・加須屋誠著

五〇年以上の長きにわたる中野美術史学の軌跡を、加須屋誠との対談をとおして振り返り、仏教美術を学ぶことの課題・方法・魅力を余すところなく収録。仏教美術入門書。

▼A5判・三四八頁／本体三、〇〇〇円

東寺宝物の成立過程の研究

新見康子著

南北朝時代の寺誌である『東宝記』や東寺百合文書にみられる宝物目録などの豊富な史料をもとに、東寺に残る文化財の伝来過程を具体的に体系化した一書。

▼A5判・六三八頁／本体二二、〇〇〇円

織豊期主要人物居所集成 〔第2版〕

いじりしる

藤井讓治編

織豊期を生きた政治的主要人物の移りゆく居所を通過的に追った研究者必携の書。

第2版の刊行にあたり、初版の誤植訂正はもちろん、一部の日付を確定・訂正した。

特に豊臣秀吉については従来関係文書編年に誤りがあつたため、大幅に訂正した。

第2版での訂正箇所は、小社HPに掲載しています。

各章は、「略歴」「居所と行動」で構成され、現在知りうる限りの居所情報を編年で掲載。

辞書的な利用はもちろん、通覧すれば秀吉の天下統一の道程や戦国武将の動静、同時代人たちの交流を詳細に追える。

《収録人物一覧》

織田信長	豊臣秀次	徳川家康	足利義昭
柴田勝家	丹羽長秀	明智光秀	細川藤孝
毛利輝元	小早川隆景	上杉景勝	伊達政宗
浅野長政	福島正則	片桐且元	近衛前久
西笑承兌	大政所	浅井茶々	孝藏主
			北政所(高台院)

《執筆者》(五十音順・肩書は刊行時)

相田文三(虎屋文庫研究主任)／穴井綾香(久留米市市民文化館文化財保護課主任主事)／尾下成敏(京都橘大学准教授)／柚田善雄(大手前大学教授)／中野等(九州大学教授)／早島大祐(京都女子大学准教授)／福田千鶴(九州大学教授)／藤井讓治(京大名誉教授)／藤田恒春(堀新共立女子大学教授)／松澤克行(東京大学史料編纂所准教授)

〔3月刊行〕

▼B5判・四八〇頁／本体六、八〇〇円

徳川將軍家領知宛行制の研究

あてがい

〔思文閣史学叢書〕

近世の領知制を基礎のところで成立させている領知朱印状に注目し、徳川將軍家の領知宛行制の形成過程とその特質を明らかにする。領知朱印状一覽付。

▼A5判・四一二頁／本体七、五〇〇円

近世史小論集

古文書と共に

藤井讓治著

日本近世政治史研究の泰斗である著者の小論のうち、眼に触れる機会の少なかったものなかで著者の主要な研究の前提、あるいはその後の展開にかかわる論考を集成。

▼A5判・四九〇頁／本体六、〇〇〇円

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

村井祐樹著

実証的な研究が不十分であった戦国大名佐々木六角氏について、可能な限り一次史料を用い、六角氏や家臣の動向、実態など基礎的事実を明かす。

▼A5判・五三〇頁／本体一一、六〇〇円

戦国大名権力構造の研究

村井良介著

主に毛利氏を事例に、戦国大名「戦国領主」の重層的な権力構造の分析から、戦国期の権力諸関係の特質を、理論的かつ実証的に描くことにより解明。

▼A5判・四五二頁／本体七、〇〇〇円

在京大名細川京兆家の政治史的研究

浜口誠至著

戦国期に室町幕府の政策決定に参画した大名を「在京大名」と規定し、代表的な存在である細川京兆家の政治的位置を明らかにすることで、戦国期幕府政治の構造的特質を解明する。

▼A5判・三二八頁／本体六、五〇〇円

日本近世貨幣史の研究

安国良一著

近世貨幣はどのように生まれ、流通し、終焉をむかえたのか。

日本の歴史上、近世ほど多種類の貨幣が流通した時代はない。金・銀・銭という幕府制定の「三貨」、近世初頭の大名領国にみられる金銀貨「領国貨幣」、藩札や私札の紙幣などを加えればその数は膨大である。さらに銭については、地域独特の数え方もあった。こうした複雑さの一方、近世の権力は貨幣制度を確立したとも認識されている。本書は、この一見矛盾する貨幣の特質を明らかにすることを試みる。一國一通貨という貨幣観を解きほぐし、その独自の機能や意味づけを問いなおす良著。

序 章	
第一部	課題と方法
第一章	三貨制度の成立
第二章	貨幣の地域性と近世的統合
第三章	地域からみた近世中後期の通貨事情(一)―播磨を中心に―
第四章	地域からみた近世中後期の通貨事情(二)―伊予の場合―
第二部 貨幣の機能とその展開	
第五章	金銀貨の機能とその展開
第六章	貨幣改鑄と新旧貨引替機構
第七章	近世初期の撰銭令と銭貨の機能
第八章	貨幣の社会的・文化的効用
第三部 寛永通宝の鑄造と流通	
第九章	寛永通宝の第一次鑄造について
第十章	寛永通宝の大坂錢座
第十一章	享保期、大坂難波錢座の鑄銭
第十二章	真鍮四文銭の鑄造と流通
終 章	まとめと展望

やすくに・りょういち…一九五三年生。京都大学博士(文学)。現在

住友史料館副館長

〔5月刊行予定〕

▼A5判・三三〇頁／本体六、八〇〇円

住友の歴史 上・下巻

朝尾直弘監修・住友史料館編

近世初頭から銅の精錬を業とし、その後金融・貿易なども手がけ、近代の財閥につながる豪商の典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。連綿と受け継がれる住友精神の源泉がここにある。

▼四六判・(上)二八六頁(下)三三二頁／本体各一、七〇〇円

近世日本の銅と大坂銅商人

今井典子著

本書は、最大市場である大坂の銅商人社会が成立・変容する過程を軸にして、銅の生産・流通の歴史を通覧。住友家文書や初村家文書など関連史料を丁寧に読み解き、長崎貿易の動向・幕府の統制・相場の変動なども視野に入れたがら論じた本邦初の銅の近世通史。

▼A5判・三一六頁／本体七、五〇〇円

大坂蔵屋敷の建築史的研究

植松清志編著

江戸時代、大名・旗本などの諸領主が、貢租米や領内の特産品を販売・貯蔵するために設置した蔵屋敷について、建築史的な観点から蔵屋敷の変遷、建築構成・空間構成、居住性などを研究する。

▼B5判・二三六頁／本体四、八〇〇円

伝統産業の成立と発展

桑田優著

三木金物は近世後期に勃興し、現在にいたる。本書は、流通機構の発達など社会的な背景にも着目し、三木金物が特産品として全国市場へ進出してゆく過程を跡付ける通史。

▼A5判・三〇二頁／本体六、五〇〇円

近世後期瀬戸内塩業史の研究

山下恭著

塩業と醤油業における開発・経営・塩専売制・流通問題を細かく分析し、さらに塩業における燃料問題と労働条件を数量的に解明した基礎的研究の一書。

▼A5判・三〇〇頁／本体六、〇〇〇円

近世大名のアーカイブズ資源

松代藩・真田家をめぐって

国文学研究資料館編

松代真田家に伝来した七万数千点に及ぶ多様な文書類は、支配・政治・経済・産業・文化・文芸など多岐に亘る内容を有し、過去はもちろ
ん現代・未来を語る上でも欠かせない第一級のアーカイブズである。
本書は、真田家のアーカイブズを中心に、藩庁の全体構造や各局
の機能などについて、記録管理の観点から分析を試みたはじめての
実践的な研究成果である。

アーカイブズ資源研究の動向と課題 (大友一雄)

第1編 藩庁の組織構造と記録管理

松代藩・国元における行政組織とその場 (原田和彦) 家老職に
おける執務記録の作成と保存 (太田尚宏) 真田家文書からみる
松代藩組織構造と「物書」役 (宮澤崇士)

第2編 藩庁と藩庁外の記録管理システム

江戸における大名課役をめぐる引継文書と藩政文書 (岩淵令治)
糸会所での記録作成・授受・管理と機能 (西村慎太郎) 松代城下
町町人地の行政情報蓄積様式にみる家と組織 (渡辺浩一) 松代
藩代官文書の管理と伝来について (種村威史) 官僚制機構の末
端としての村 (福澤徹三)

第3編 大名家伝来文書群と記録管理

幕府老中職文書群に関する基礎的研究 (大友一雄) 松代藩御納
戸役の職掌と記録管理 (降幡浩樹) 藩主生母の格式をめぐる意
志決定の史料空間 (福田千鶴)

第4編 伝来と管理

真田家印章の使用と伝来 (山中さゆり) 真田宝物館所蔵真田家
文書の管理と容器の特質 (工藤航平)

【3月刊行】

▼ A5判・四〇八頁／本体七、〇〇〇円

幕藩政アーカイブズの総合的研究

国文学研究資料館編

幕政・藩政文書各々の管理・伝来について具体的に検討し、各藩において文
書管理の実務にあたった者達へ焦点を当てること、幕藩文書管理の歴史に
新たな知見を示す。

▼ A5判・五〇四頁／本体八、五〇〇円

一九世紀の豪農・名望家と

福澤徹三著

地域社会

中核的豪農と一般豪農の経営レベルの比較、金融活動の分析を中心に、畿内・
信濃の地域間比較の視点も加え、その生業・営為を近世・近代を通じて明ら
かにする。

▼ A5判・三三〇頁／本体六、〇〇〇円

畿内の豪農経営と地域社会

渡辺尚志編

18世紀末以降、河内国丹南郡岡村の庄屋を世襲した豪農・岡田家の「岡田家
文書」を多角的に分析し、畿内における村落と豪農の特質を経済・社会構造
の観点から解明。

▼ A5判・五〇八頁／本体七、八〇〇円

近世京都近郊の村と百姓

尾脇秀和著

佛敎大学研究叢書

相給村落であった山城国乙訓郡石見上里村と、同村百姓にして公家家来でも
あった大島家を対象に、近世百姓の変容と実態を多面的に明らかにする。

▼ A5判・二九四頁／本体四、八〇〇円

牛と農村の近代史

板垣貴志著

家畜預託慣行の研究

牛を介して取り結ばれる人々の社会関係を明らかにし、それが近代農村で果
たした歴史的意義を解明。地域社会の調和と共存のために努めた名もなき農
民群像を描く。

▼ A5判・二六六頁／本体四、八〇〇円

江戸後期儒者の ファイロロギー

原典批判の諸相とその国際比較

竹村英二著

【3月刊行】

江戸時代後期、幕末の日本では高度な考証的学問が発展した。それを担ったのは「市井」の儒者たち。彼らのこうした属性は、同時代中国の考証学者の多くが政治・社会的環境と相即不離な状況にあったのと異なり、近代の学問の基本である客観性と実証性を備えた、既成思想に束縛されない学究活動を可能とした。これは少なくとも十八世紀という時空においては世界史上きわめて稀有なものであった。

日本における実証的学問の成立は清朝考証学と近代の西洋体験を基盤とする、こうした所論は再考を余儀なくされるのである。

総論編

序 論 本書の中心的課題、ならびにその射程
第一章 江戸中、後期における漢学学問方法の発展

各論編Ⅰ 古典テキスト研究の諸相

第二章 十八世紀日本儒者の「尚書」原典批判
第三章 東條一堂の「論語」研究
第四章 久米邦武と「尚書」研究
第五章 思考様式醸成要素としての
儒学テキストと読解の作法



各論編Ⅱ 古代言語への意識／接近

第六章 太宰春臺における古文の「體」「法」重視
第七章 理解力・翻訳力・外国語習熟力
結 論 日本儒学における考証学的伝統と原典批判

▼A5判・二五六頁／本体五、五〇〇円

たけむら・えいじ：一九六二年生。豪メルボルン大卒。英ロン
ドン大大学院修了。現在、国士館大学教授。

会沢正志斎書簡集

大阪大学会沢正志斎書簡研究会編 【3月刊行】

大阪大学大学院文学研究科が所蔵する会沢正志斎書簡を活字翻刻。

会沢正志斎は、後期水戸学を代表する儒学者の一人。本書簡群は、会沢が、弟子で甥でもある寺門政次郎およびその父喜太平に対して宛てた書簡を主とし、江戸に滞在していた寺門が水戸の会沢に対して定期的に府下の情報を送り続けた、その返答としての性格をもっている。また、会沢著作の書肆とのやりとりに関する記述が多く存在するのも特徴。

緊迫する幕末の情勢と、そのなかで行われた思想の営為を解明するための一級史料。



【翻刻】

弘化元年～文久三年・年未詳 計四〇八通

【解題】

会沢正志斎書簡の来歴について 飯塚一幸
会沢正志斎の政治思想と著作出版事情 奈良勝司

▼A5判・三四八頁／本体一一、五〇〇円

戊辰内乱期の社会

佐幕と勤王のあいだ

〔1月刊行〕

宮間純一著

鳥羽・伏見の戦いで幕を開けた戊辰内乱は、否応なく当時の社会全体を巻き込み、あらゆる身分の人びとに日和見を許さなかった。内乱の当事者たちはそれぞれの正当性を喧伝し、彼らの支配を受けることになる人びとは、時代が佐幕から勤王へと移りかわるなかで立場を表明することを迫られた。

みずからの拠るべき正当性を探し求める者、保身のために立場を翻す者、混乱に乗じて地位の上昇を図る者――、新出史料を活用しながらさまざまな思想が交錯する内乱期の社会像を描出する。

内容

- 第1部 「官軍」の正当性
 - 第1章 「官軍」と王権の表象
 - 第2章 公家の位置―鷲尾隆聚を中心に―
補論 榎本軍首脳部処分問題にみる「朝敵」寛典の論理
 - 第2部 旧幕府抗戦論の限界
 - 第3章 旧幕府抗戦論の正当性
 - 第4章 堀田正倫の上海・藩士の日記を素材に―
 - 第5章 「朝敵」藩の恭順論―伊予松山藩を事例に―
 - 第3部 社会集団の欲求と草莽隊
 - 第6章 神職集団の武装化
 - 第7章 草莽隊の上昇志向―下野利鎌隊を事例に―
 - 第8章 地方大社の勤王運動―香取神宮尚古隊―
 - 第4部 地域の葛藤
 - 第9章 関東農村の佐幕的状况―上総国を中心に―
 - 第10章 旧旗本阿部詮吉郎の朝臣化と知行所農兵隊の動向を中心に―
- ▼A5判・三二八頁／本体七、五〇〇円

みやま・じゅんいち…一九八二年生。国文学研究資料館准教授。

今村家文書史料集

今村家文書研究会編

(全2巻)

戦国期以来、京都近郊の伏見街道沿いで地域の有力者として代々続いてきた、今村家に伝えられた文書群の翻刻史料集。

総点数は約六七百点、享祿四年から約四百年間にわたる史料のうち①戦国期／近世前期の史料、②今村家の由緒や経営に関する史料、③幕末の加茂川筋に関連する史料、④六条村や錢座跡村の「穢多」および「非人」関係史料、⑤幕末／明治初年の公用日誌を中心とした近代文書を翻刻し、解題を付す。

文書全点の目録および絵図類の高精細画像とトレース図三〇点を収録したCDを両巻(上下巻とも同内容CD)に収める。

総説今村家文書について 今村家文書の調査経緯／今村家文書の概要

内容

- 上巻 中世～近世編
 - 第一章 戦国・近世前期の今村家 解題／年月日の明記された文書・帳簿類／年未詳の文書帳簿類
 - 第二章 今村家の由緒と経営 解題／今村家の由緒と泉涌寺・妙法院／今村家の経営／今村家住宅の建築構成と変遷過程／今村家の聞き取り調査
 - 第三章 幕末の加茂川筋改造と柳原庄 解題／安政三年の加茂川筋御深い御普請／東台用水の普請と水車の設置／足を引つ張る加茂川筋普請入用
 - 第四章 賤民集落と非人小屋 解題／錢座跡村／錢座跡村出村／大西組(小稻荷)／七条裏等非人関係
 - 下巻 近代編
 - 解題 近代の柳原庄と今村家 添年寄・中年寄としての今村忠右衛門／柳原庄の庄屋今村家／近代柳原庄の形成と柳原町
 - 第一章 本町通と柳原庄の近代
 - 第二章 今村家の人事
 - 第三章 明治維新期の日記録
- ▼B5判・二八四頁／本体八、八〇〇円
▼B5判・三六〇頁／本体九、二〇〇円

〔2月刊行〕

記念植樹と日本近代

林学者本多静六の思想と事績

岡本貴久子著

[4月刊行]

ひとはなぜ樹木を植えるのか。

近代は、実利的な造林計画、あるいは都市美運動などさまざまな場面で記念植樹が大いに奨励された時代であった。

近代日本で行われた「記念植樹」を、個別の歴史事象、林学の創成と展開など時代背景と照合しながら、その活動の主導的立場にあり、方法論を構築した林学者・本多静六に注目し、彼の生家の富士山信仰・不二道の思想的影響も視野に入れながら、近代国家形成のあゆみに記念植樹を位置づける。

序章

第一部 「記念植樹」とはなにか——形態と歴史的諸相

第一章 記念植樹の形態

第二章 記念植樹をめぐる歴史的諸相

第二部 林学者本多静六の思想

第一章 不二道の歴史と思想

第二章 本多静六と明治の林学・林政

第三章 本多造林学における記念植樹の方法と理念

第三部 「記念植樹」の近代日本——明治・大正・昭和の系譜

第一章 学校教育と記念植樹

第二章 御聖徳と記念植樹——明治から大正へ

第三章 平和と記念植樹——第一次世界大戦後の平和記念事業を主体に

第四章 帝都復興と都市美運動——都市緑化の方法と理念

第五章 「大記念植樹」の時代——昭和戦中期の時局を基軸に

終章 記念植樹と日本人——ひとはなぜ樹を植えるのか

▼A5判・五六八頁／本体九、〇〇〇円

おかもと・きくこ：国際日本文化研究センター共同研究員。

東京大学大学院人文社会科学系研究科修士課程修了、総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了、博士(学術)。

近代日本公園史の研究

丸山宏著

近代欧米都市起源の公園が、いかに近代化の装置として導入され、衛生問題・都市問題・記念事業・経済振興策・政治的役割などさまざまな問題を孕みながら受容されてきたかを社会史のダイナミズムのなかにとらえる。

▼A5判・四〇〇頁／本体八、四〇〇円

日本庭園像の形成

片平幸著

19世紀末から20世紀初頭の欧米人の日本庭園論、それへの日本人の反応、という両者の「往還」を丁寧にとり、一九三〇年代に至って日本庭園の「独自性」が規定されていく過程を追う。

▼A5判・二四〇頁／本体四、〇〇〇円

近代日本〈陳列所〉研究

三宅拓也著

明治期から、農業・工業・商業を奨励する目的で各地に建設された公共の陳列施設。その設置の経緯を検証し、制度・活動・建築を含めて都市との関わりを注目する。(陳列所)の実態を豊富な図版とともに明らかにする。

▼A5判・六四〇頁／本体七、八〇〇円

水系都市京都

小野芳朗編著

近代京都の都市史を水量・水質・水利権に着目して水インフラという視点から論じるとともに、同一水系に属する伏見が一度は独立市制を志しながら京都へ合併される顛末を明らかにする。

▼A5判・三一〇頁／本体五、四〇〇円

近代古墳保存行政の研究

尾谷雅比古著

近代日本の文化財保存行政について古墳を素材としてとりあげ、その背景にある国家の理念とそれに基づく施策、実施される行政行為の歴史の変遷をあとづける。巻末に歴史的行政資料や行政文書を抽出した関係史料集を取録。

▼A5判・三六八頁／本体七、二〇〇円

花道の思想

井上治著

〔3月刊行〕

「花道の思想」を紐解くべく、第一部では歴史の流れを概括しながら「出生」（草木の自然な形姿）「花矩」（人為的な意匠）「修行」（挿花を通じての求道）という観点で「花道思想の構造」を整理。第二部では、古くから挿花と密接に結びついてきた宇宙像が江戸末期に揺れ動き、花道思想にどう影響したかをみた後、近代の花道家が新たな社会・文化・学術的環境の中で、花道文化の伝統とどう向き合ったのかを「風流」と「芸術」に注目して考察。花道思想の構造と、その近代における変容をみることで、日本の挿花文化の背後にある思想と、今日の挿花文化の位置に迫る。

序文（倉澤行洋）

……第一部 花道思想の構造……

第一章 出生論（縮景の思想／写生の思想／矯正の思想）

第二章 花矩論（「しん」の思想／道具の思想／三才の思想）

第三章 修行論（稽古の思想／工夫の思想）

小括

【内 容】

……第四部 近代と花道思想……

第二章 花道と「宇宙」（天円地方／紅毛の天学／花矩と人倫）

第五章 花道と「風流」（明治の花／風流と自然）

第六章 花道と「芸術」（自由花運動／芸術と宗教／近代と求道）

小括

▼四六判・二六〇頁／本体一、八〇〇円



評一
書タ
集
ト
ッ
ネ
サ
詳細は32頁

いのおえ・おさむ：一九七六年、大阪府生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。現在、京都造形芸術大学准教授。花道研究会「北白川会」主宰。

花道古書集成 [全5巻]

華道沿革研究会編

初期東山時代の代表的秘伝書をはじめ、江戸初期、中期の諸流祖の花道書から幕末に至る主な花道書を収録した書籍（大日本華道会、昭和5年）を復刻。

▼A5判・総三四〇〇頁／本体三二、〇〇〇円

続花道古書集成 [全5巻]

続花道古書集成刊行会編

古刊本中心の前書に対し、未刊の古写本に重点をおく。花道草創の室町時代初期から各流各派が成立し爛熟した江戸時代末に至る秘伝、稀覯本を網羅。

▼A5判・総二七一〇頁／本体三五、〇〇〇円

近代茶道の歴史社会学

田中秀隆著

「伝統文化とは近代に自己変革に成功した文化である」との近代茶道史テーゼにもとづき、近代国家の文化的アイデンティティの生成構造面から、茶道が日本の「伝統文化」として認知されるようになった過程を考察。

▼A5判・四五四頁／本体六、五〇〇円

近代の「美術」と茶の湯 言葉と人とモノ

依田徹著

明治維新で価値を落とした茶道具は、どのようにして美術作品として再評価されるようになったのか？ 近代美術史の視点から、明治以降の茶道具の評価を捉え直す。美術作品と茶道具の境界線を問う、革新の一書。

▼A5判・三三二頁／本体六、四〇〇円

近代日本における書への眼差し

高橋利郎著

日本書道史形成の軌跡

毛筆で書かれた肉筆の文字資料が、近代に「書」として位置付けられていく過程を探り、書道史形成の軌跡をたどる。さらに近代数寄者が私的に書跡を鑑賞する場について考察し、まなざしの影響の大きさを論じる。

▼A5判・三〇四頁／本体四、八〇〇円

江戸文化が甦る

トロンコワ・コレクシヨンで読み解く琳派から溝口健一まで
大手前大学比較文化研究叢書12

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

〔5月刊行予定〕

知られざる江戸版本、浮世絵の宝庫トロンコワ・コレクシオンをテーマに、近世美術から近代映像作品を対象として、多彩かつ重厚な論を全文日仏両語で収録する。二〇一四年から続く大手前大学日仏文化交流シンポジウムの集大成。

I トロンコワ・コレクシオンをめぐる

装飾芸術美術館付属図書室の日本コレクシオンに見る
トロンコワ・ルポーティ寄贈品について〔ロール・アベルシル
トロンコワ旧蔵の山東京伝「近世奇跡考」の草稿本

「クリストフ・マルケ

宗達のグラフィック・デザインにおける「無常」

「林進」
「松尾芳樹」
「柏木加代子」

立ち美人の居るところ

II トロンコワ・コレクシオンの周辺

フェリシアン・シャレレー「凶入り日本」と
エマニュエル・トロンコワ「柏木隆雄」

ジャポニスムと琳派・装飾再考
「うつり」と「うつし」の観点から「稲賀繁美」

III 日本の近代美術と現代アート

創作について
「井澤幸三」
私の作品について「いまふくぶみよ」

私の立ち位置
「久木一直」

絵画
「山田信義」

シンポジウムを総括して
「マリィカトリヌ・サユット」



▼A5判・三九〇頁／本体三、八〇〇円

俳句とスペインの詩人たち

田澤佳子著 マチヤード、ヒメネス、ロルカとカタルーニヤの詩人
スペインの詩に俳句がいかに受容されたかを、こまやかに読み解く。

▼A5判・三五二頁／本体五、〇〇〇円

没理想論争とその影響

佛教大学研究叢書
坂井健著
坪内逍遙と森鷗外との間で繰り返された「没理想論争」を考察する。

▼A5判・三七四頁／本体八、九〇〇円

万国博覧会と人間の歴史

佐野真由子編
従来の研究の枠組みを超え、アジアや現場の視点も踏まえた新共同研究。

▼A5判・七五八頁／本体九、二〇〇円

日仏文学・美術の交流

「トロンコワ・コレクシオン」とその周辺
大手前大学比較文化研究叢書10

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

明治期に日本で蒐集されたコレクシオンを柱に、日仏美術の交感を論じる。

▼A5判・二八四頁／本体二、八〇〇円

日仏マンガの交流

大手前大学比較文化研究叢書11
ヒストリー・アダプテーション・クリエイション

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

マンガ／バンド・デシネ文化について、特徴・受容・翻訳などの視点から考察。

▼A5判・二八六頁／本体二、八〇〇円

和食文化 ブツクレット

— ユネスコ無形文化遺産に登録された和食

和食文化国民会議監修

【第一期・全10巻 3ヶ月に1冊刊行】

和食の典型的なスタイル、和食文化というべき食べ方、食器、しつらい、マナー。さらに和食の食材、調理法、盛りつけなど、一番基本となる所が学べるテキストシリーズ。

▼各巻 A5判・九六頁／本体 九〇〇円

第1巻 和食とは何か 熊倉功夫・江原絢子「二〇一五年11月刊行」

「和食とは何か」根本的な部分を明らかにする

第2巻 年中行事とときたり 中村羊一郎「2月刊行」

日本の民俗・風習に根ざした多様な食を紹介

第3巻 おもてなしとマナー 後藤加寿子・熊倉功夫「5月刊行」

第4巻 和食と健康 渡邊智子・都築毅

第5巻 材料と調理 大久保洋子・中澤弥子

第6巻 和食の歴史 原田信男

第7巻 うまみの秘密 伏木亨

第8巻 ふるさとの食べもの

第9巻 日本酒と和食

第10巻 緑茶と和菓子

今日節子・清純



日本の食の近未来

熊倉功夫編

「食の豊かさ」は今後何をもちたらずのか？ 謳歌するだけでよいのか？ 8名の研究者が、食文化の近未来について共同研究会を行った成果。

▼四六判・二二六頁／本体二、三〇〇円

老舗に学ぶ京の衣食住

西岡正子編

老舗の主人や、おかみ自らの言葉で綴る「本物の京都学」。技や歴史はもとより、生活のなかに息づく智恵や文化、経営哲学、理念を紹介する。

▼A5判・二四二頁／本体一、九〇〇円

講座 日本茶の湯全史 (全3巻)

茶の湯文化学会編

時代を輪切りにしながら見る本編、重要な要素を通史として見渡す特論からなり、文化史の中に位置づけられた茶の湯の展開を中世・近世・近代と通覧。

▼四六判・平均三四〇頁／各本体二、五〇〇円

菓子文庫シリーズ

柳瀬木鶏編

日本古来からの和菓子の伝書を影印し、その翻刻と解説を加えたシリーズ。

▼B5判・平均五〇頁・和紙綴和装幀映入

料理新製 以毛百珍

本体一四、五六三円

古今名物御前菓子図式 (全2冊)

本体二四、二七二円

諸国名物御前菓子秘傳鈔 (全2冊)

本体二四、二七二円

餅菓子即席 増補手製集

本体一四、五六三円

林氏塩瀬山城傳來記

本体一四、五六三円

第一期・全10巻 予定構成

オンデマンド復刊 書目一覧

受注生産のため、出荷に一週間ほどいただきます

崇徳院怨霊の研究 山田雄司著「初版二〇〇一年」 3月復刊	本体六、四〇〇円
翁の生成 渡来文化と中世の神々 金賢旭著「初版二〇〇八年」 4月復刊予定	本体五、〇〇〇円
対外関係と文化交流 田中健夫著「初版一九九一年」 4月復刊予定	本体一三、八〇〇円
中世京都の民衆と社会 河内将芳著「初版二〇〇〇年」 3月復刊	本体八、八〇〇円
中世京都の都市と宗教 河内将芳著「初版二〇〇六年」 3月復刊	本体六、八〇〇円
織豊期の茶会と政治 竹本千鶴著「初版二〇〇六年」 4月復刊予定	本体九、五〇〇円
日光東照宮の成立 近世日光山の「莊嚴」と祭祀・組織 山澤学著「初版二〇〇九年」 4月復刊予定	本体八、五〇〇円
元三大師御籤本の研究 おみくじを読み解く 大野出著「初版二〇〇九年」 4月復刊予定	本体四、〇〇〇円
明治前期の教育・教化・仏教 谷川穰著「初版二〇〇八年」 5月復刊予定	本体七、五〇〇円
神仏習合の歴史と儀礼空間 嵯峨井建著「初版二〇一三年」	本体八、六〇〇円
近世吉野林業史 谷彌兵衛著「初版二〇〇八年」 本体一、一〇〇円	
明治博物館事始め 椎名仙卓著「初版一九八九年」 本体四、八〇〇円	

ネット書評サポーター 募集!!

◎応募要項◎

本社刊行の新刊について、ご自身のブログやSNSで本書の書評コメントを書いていただける方に、書籍を献本します。

募集内容…書籍ごとの募集です。募集書籍は左記をご参照下さい。

字 数…特に制限しませんが最低でも800字以上はお書きいただくようお願いいたします。

発表媒体…ご自身のブログ、facebookなど、インターネット上で一般公開されているもの。

アマゾンのレビューなどネット書店のレビューは対象外です。特定の範囲にしか公開されていないもの、一時的にしか公開されないものは除きます。

facebookの場合は、投稿の公開範囲を「公開」にしていた必要があります。

発表期限…書籍送付後3か月以内に公開してください。

申込方法…メール (pub@shibunkaku.co.jp)・FAX・郵送で左記の項目をお知らせ下さい

書評していただける書籍

発表する媒体

(媒体を確認できるURL(アドレス)を合わせてお知らせ下さい)

申込に当たってのアピールポイント

お名前・ご所属・書籍お送り先住所・電話番号・メールアドレス

審査結果の通知…各書籍募集締切後、採否の結果をお知らせします。審査の内容についての問い合わせには応じられませんのでご了承下さい。

現在募集中の書籍は左記の通りです。今後も随時、募集いたします。乞うご期待!!

ネット書評サポーター 募集

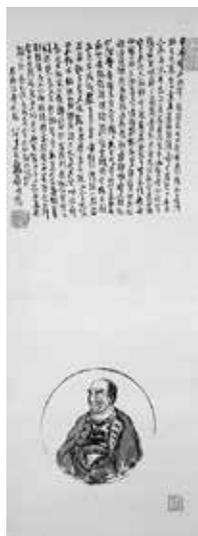
書目

幕末外交儀礼の研究 (表2掲載)	5月20日	3名	募集締切	募集人数
変容する聖地 伊勢 (表2掲載)	5月20日	3名		
花道の思想 (29頁掲載)	5月20日	3名		

美の縁

び

よすが



富岡鉄斎は近世日本が生み出した教養の巨人とも言うべき人物であり、日本における最後の文人と謳われました。中国の仙人を彷彿とさせるその顔貌を見れば、彼が「万巻の書を読み、万里の道を往く」という座右の銘を生涯実践した人であったことが頷けるでしょう。

鉄斎は有名な文人画だけでなく、大和絵、仏画、書から日常の細かいことに至るまで、ありとあらゆるものを書画の題材に扱いました。

今回紹介するのは、山田長政という人物を紹介する目的で描かれた肖像画で、賛文には山田長政の来歴が記されています。山田長政は江戸初期に

◆やまだながまさしょうぞう山田長政肖像◆とみおかてつざい富岡鉄斎

シャム（現在のタイ）へ渡り、その地の日本人町で活躍し、その後、アユタヤ王朝の高官となり、アユタヤ王を宗主とするリゴール（六昆）の国王に任じられた人物です。

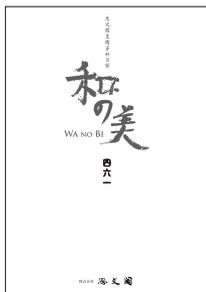
このような賛文を読み、意味を知ってからもう一度画に目を移すと、今まで知らなかった新しい世界が目の前に開かれる思いがします。このような世界こそが、鉄斎の持つ教養の海の世界であり、その豊饒な精神世界は一万点を超えるといわれる書画作品に展開して現在に伝わっています。

今回の作品をきっかけに、富岡鉄斎という人物の魅力を味わっていただけたらと思います。

（思文閣美術事業部・成木俊介）

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

大切な品を、
大切にしてくれるひとへ

美術品、納得のご売却をお手伝い

創業70余年
長年の実績

確かな
審美眼

多様な
売却方法

無料査定

まずは査定のお申込みを

■「査定・買取り申込フォーム」
www.satei.shibunkaku.co.jp

■「美術品査定申込アプリ」



美術品査定

SHIBUNKAKU
思文閣

〒605-0089
京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
tel: 075-531-0001 satei@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年4回程度発行)。
※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



初版本
みだれ髪
全一冊

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp



ぎやらしい思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ぎやらしい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/